



千島列島で比較的大規模な噴火が発生しています

千島列島のライコケ島(雷公計島、Raikoke Island, 下図の赤枠)で6月22日から成層圏に達する噴火があり、その噴煙は高度 13,000m ほどに到達しました。



下の写真は国際宇宙ステーションから撮影された噴火の様子です(NASA: Johnson Space Center)。



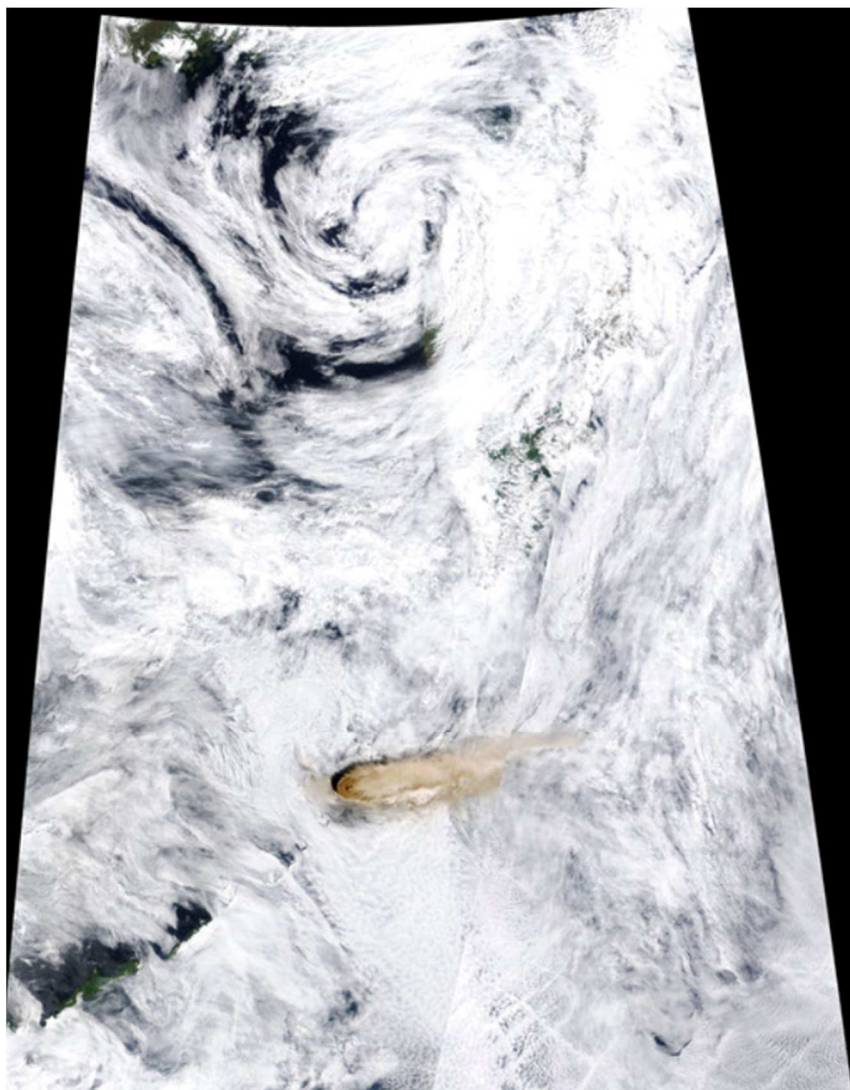
<https://www.nasa.gov/image-feature/raikoke-erupts>

さらに航空機や衛星観測データによると、火山灰は航空機の巡航高度で拡散しており、周辺空域が北アメリカと日本を結ぶ航空路に該当することから、航路の変更などの措置が取られました。このように火山噴火は遠隔地でも航空機の運行に大きな影響を与えます。実際、アメリカへの航空便に航路変更による遅れという形で影響が出ています。

通常国際線の航空機の飛行高度(高度 10,000m 程度)では、巻雲などを除き、雲はほとんど出ません。そのため、航空機からの初日の出や日食観測が確実に見えるのです。



次のページの写真でもわかりますように、噴火による影響は、成層圏まで及ぶことがあります。つまり通常の雲のはるか上まで影響が出ることがあります。そのため、航空機の運行に影響が出るのです。



ライコケ島火山から噴出された火山灰の影響 (NASA による)

もし、富士山が噴火した場合には、羽田や成田が長期間使用できなくなるほか、東海道新幹線も架線への火山灰の付着などの影響でかなりの期間運休となります。道路も東名も新東名も中央も通行止めになると考えられます。

また、富士山噴火では、現状では政府は電力に関して、被害はほとんど想定していません(桜島の事例から1cmの降灰がある地域で18%の停電があると予想)。しかし実際には降灰+雨が重なると送電系の絶縁破壊(碍子がショートする等)が発生し、より大規模の被害が予想されます。

富士山噴火は想定外の危機ではなく、想定内の危機なのです。 昨年の産経新聞が警鐘を鳴らしています。お時間のあるときにぜひご一読頂ければと思います。

<https://www.sankei.com/premium/news/180530/prm1805300007-n1.html>



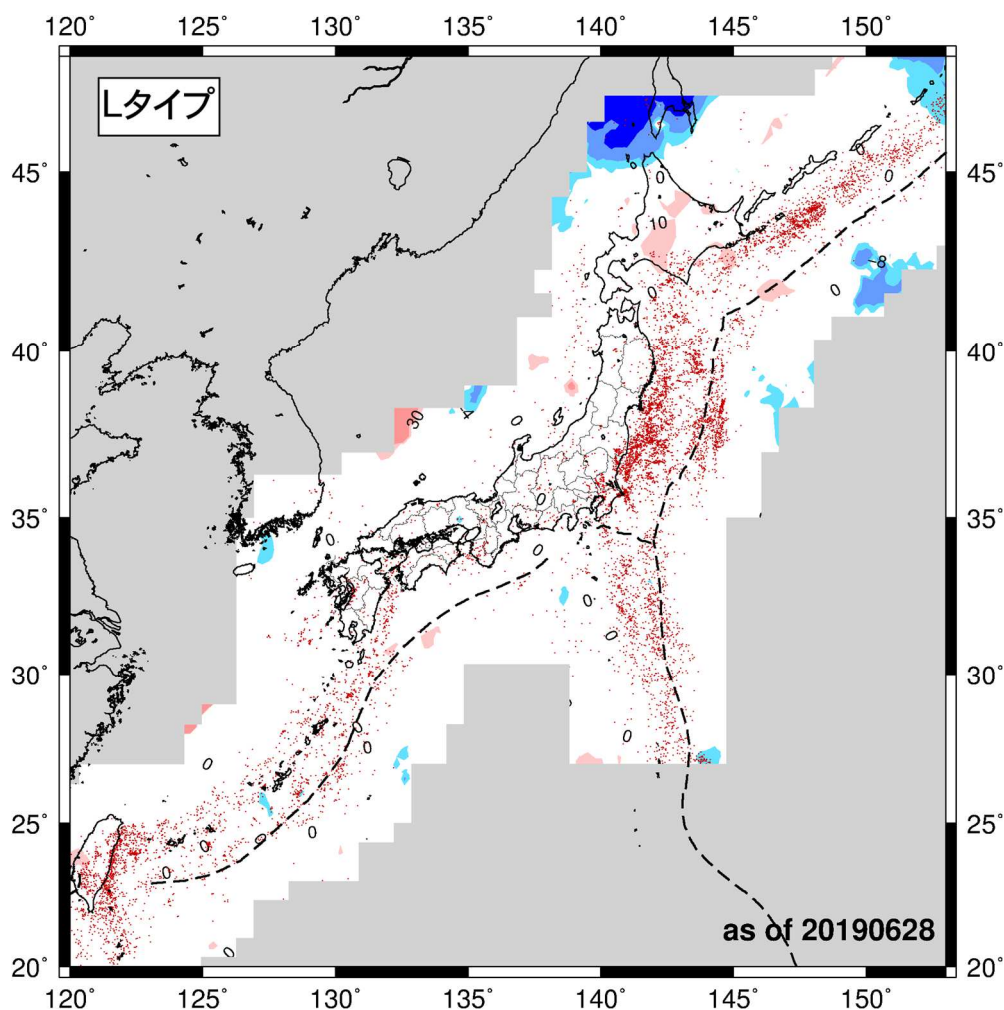
この記事には日本自治体危機管理学会・会長のコメントも掲載されており、まさに「噴火の影響範囲が大きすぎて容易に議論が進まないのが実状」という事だそうです。

極端に言えば、地震は揺れさえ終わればすぐに復興に向かえますが、それに対して噴火は長期間続き、地震とは全く異なった時間軸を考慮した対応が必要となるのです。

日本およびその周辺の広域地下天気図®

今週は5月20日のニュースレターに引き続き、現在の気象庁の観測網で解析できる最大範囲の領域の解析です。主に海域で発生するマグニチュード7以上の地震を対象とした解析です。

今回はLタイプの2つの地下天気図をお示しします。



北海道北方の青い異常領域は、気象庁地震データによる解析可能範囲の限界であり、異常の精度は低いと考えられます。それ以外には、現時点で日本列島およびその周辺海域で、マグニチュード7を大きく超える地震が発生する可能性が高い地域は地下天気図解析では、見当たりませんが、これまでの解析結果(異常の消長)から、沖縄本島近海および岩手県はるか沖の OUTER RAYS では M7クラスの地震発生の可能性が残っていると考えています。また別の地下天気図解析でお伝えしていますが、九州北部は陸域で一番地震発生の可能性が高い地域と考えています。